

ひまわり

メッセージ

8号

2011.11.8

西濃圏域
発達支援センター
ひまわり

発行所：中野にみ子

表情の中に見えるもの

秋が日一日と深まりつつあるが、身の回りの整理がなかなかできず、やっとな夏ものと冬ものの入れ替えをしました。作業中、ふと目を上げた時、浴見に映った自分の表情にギョツとしました。考えごとをしている時、私はこんなに厳しい表情をしているのか……と。

乳幼児家庭教育学級の担当者の方が人に話しかけている私の表情を撮って送って下さるので、私っていつもこんな表情をしているのだなあと思いついていたのだが、おそらく刻々と表情を変え、時には人には見せたくない内面をさらけ出し、すごい形相をしているのかもしれないとその時、思ったのです。皆さんにもそんな経験があるのではないでしょうか？

ところで、最近私は子どもたちの表情が気になってい
ます。健診の場で表情に変化が見られない子たちが増え
ているように思うのです。かかわってくすぐってみても笑
わない子、無表情な子の中にどんな思いがあるのだろうか
……？人には笑わないのに携帯電話の画面やゲームには
楽しそうに笑う子、自分と物（おもちゃ・ゲームなど）の関
係はあっても、お母さんや他の人と共感して一緒に楽しめ
ない子など幼い子たちの内面に一体何が起きているのかと
不安になります。そして、では大人の表情は……と改めて
見ると、子どもに笑いかけない大人も意外に多いことに
気づきます。笑わない保育士、無表情な療育者や教師
など子どもに接する職業の人たちの中にも気になる表情
がいっぱいあります。

小学生になって、相手の表情が読めない子、自分の気持
ちを表情カードを使って表す学習をする子を目にする
子ども達は大人の社会を映し出しているとも思います。表
情は心を映す鏡です。子どもたちに心から笑いかけ、共に
喜び、ほめ、そしてきちんときちんと叱ることができる大人であり
たいと思うのです。

AD/HD と (Attention-Deficit / Hyperactivity Disorder)

薬の服用について

AD/HDは、日本では注意欠陥・多動性障害と約されています。しかし、欠陥ということではふさわしくないといいことで、近年「注意欠陥・多動性障害」としようという動きがあります。

主な症状

①不注意(忘れ物が多い、物ごとに集中できず、うっかりした間違いをしやすい)

②多動性(落ちつきがなく、じっとしていることができない)

③衝動性(思いついた行動を唐突に行い、順番待ちや我慢ができない)

といった症状が、少くとも二つ以上の状況(例えば学校と家庭など)で見られます。誰でも多かれ少なかれ、この様なことは見られますが、年令不相応に、しかも長時間持続して、学校生活や友人関係などに問題が生じている

場合にAD/HDと診断されます。

しかし、症状のあらわれ方や程度の差が大きく、一緒にいる相手や担任の先生によっても差が見られたり、学校と家庭で差があることは、よくあることです。

主な原因

脳の発達のかたよりが関係していると考えられ、親のしつけや育て方が原因ではありません。

AD/HDでは、脳内の神経伝達物質のドーパミンが不足し、神経伝達に異常がおこっていると考えられています。ドーパミンが不足すると、「物を順序立てて行う」とか「課題の優先順位をつけて行う」といった実行機能が低下したり、「待つことができない」といった報酬系と呼ばれる機能が低下すると考えられています。それに遺伝要因や出産時のトラブル、環境因子などが複雑にかみ合ってADHDの症状があらわれると考えられるのです。

付随する症状

AD/HDに対して適切な対処が行われなかった場合、様々な付随症状があらわれ、更に二次障害へと問題が深

刻化していく場合もあります。

・怒りっぽくなり、攻撃的な行動、反抗的な態度、暴言などがふえる。

・学習に遅れが見られるようになる。

・社会的スキルが身につかず、友人とのトラブルが多くなる。

・いつも叱られてばかりいたり、皆ができることができなかつたりして自尊心や自己評価が低くなる。

・情緒が不安定になる。

適切な対応・治療

① まず環境を整えます。AD/HDであることを理解すること、やるべきことが分かりやすくしてあるか、指示が理解しやすいかなど、見直してみることも大切です。本人の苦手として知っていることを知って、例えば黒板を写すのに時間がかかるようであれば消さずに残しておくなどの工夫もでき得ることです。本人の行動を、本人自身だけの問題と見なさず、周りの条件や環境を考慮していくことが必要です。

② ペアレント・トレーニング

保護者にお子さんのことを理解してもらって、好ましい行動をふやし、好ましくない行動をへらしていくために学んでもらう方法です。

③ ソーシャルスキルトレーニング

状況に応じた適切な行動がとれるように社会のルールやマナーを教え、それを般化していくようにします。

④ 薬の服用

脳の神経伝達物質ドパミンやノルアドレナリンの働きを活性化するコンサータという薬の服用が効果的だといわれています。朝服用すると、一、二時間後に効いてきて約十二時間持続することです。

この薬は、午後や夜に飲むものではなく、活動する昼間に効くように作られています。学校が休みになる土曜日や日曜日は医師と相談の上、服薬を止めることもできます。

お子さんによっては、チック、不眠、食欲の低下などの副作用が出る場合もあります。



㊦ 拗音(小さいやゆよ)や

促音(っ)につまずいている子

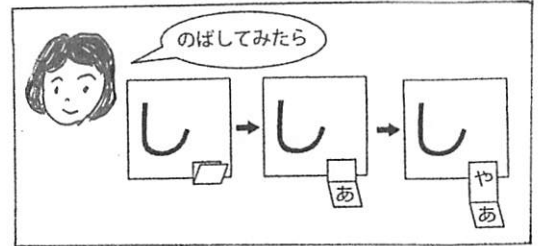
へどんな音が隠れてる？

まず、清音で、どの字がかくれているか考えてみましょう。例えば、「ま」を伸ばして言ってみると、「まーあ」と「あ」の字がかくれているということを見つけます。「む」だったろう、「う」ですね。

次に、拗音のぼすと、どんな字がかくれているか考えてみます。「キヤ」をのぼすと「あ」、「キゆ」は「う」「きよ」は「お」ですね。拗音カードを「あ」「う」「お」が出た仲間を集めてみると、小さい「ヤ」「ゆ」「よ」にかくれている字がわかってきます。



では、「しゃ」と言われた時に丸の中に入る字はどれでしょうか? 「あ」がかくれているので「や」ですね。



このように拗音の練習カードを作ってみて、拗音のどの字を書いたらいいのか、分からない子の学習に使ってみましょう。
シヤ行、キヤ行、チヤ行、ヒヤ行、ミヤ行、リヤ行など、いろいろなことばがありますが、私たちもまだまだ知らないことばもありますね。

へいくつの音でできている？

私たちが日頃使っていることばは、音韻でできています。例えば「イヌ」は二つの音韻、「パンダ」は三つですね。幼児期に、ことばあそびなどで「イヌ」だったら二人のグループに、「ライオン」だったら四人グループにとりょうに音韻を意識させる遊びなどの位の子どもたちが経験しているでしょうか? 課題あそび的なことばあそびは音に比べて少なくなっているように思いますが、実際のところはどうかでしょうか?

家庭でも、お風呂に一緒に入りながら、音あてあそびなど、やってみて下さい。「ママが言った音だけ手を叩いてみよう」というあそびです。親子で交代しながら問題を出し合ってみるのも楽しいと思います。

さて、「小さい「っ」が入ったことばについても、音韻を意識して考えてみたいと思います。



こうして、いくつかの音でできているか、音の数だけ色ぬりをしていきます。コップ、ヨット、ロケット、ベクト、ラケット、バスケット、キック（切り）、マット、ゴケットなど、色々なことばをさがしてみましよう。

保育士さんからの質問

・お友だちに対して、とても厳しく「くしてない」と聞いてつめる子がいます。どうしたらいいですか？

・ドッジボールなどで相手方のボールが線から出たとか今、相手に当たったのにか言い張って、絶対に自分の考えを押し通そうとします。

・一番でないと何事もおさまらず、さうでないと怒って大声でわめき散らします。

・クラスの子どもたちが「○○ちゃんはいけない子」という目で見るようになっていきます。いつのまにか○○ちゃんは特別な子になってしまっく、誰も反対せず、嵐がすきるのを傍観している感じます。

・カードゲームをやっている時も、負けそうになるとカードをくしゃくしゃにしてしまっくゲームが成り立たなくなっくしてしまいます。どうしたらいいでしょうか？

こういう質問は、どんなに書いても書き足りない位ありますが、保護者に話しても「家では何も問題ありません」と言われ、反対に「うちの子だけ先生はせ

めるんですね。「いつも悪いことばかり言われて怒られてるから、よけいに悪いことをするんです。先生の責任でしょ!!」と言われてしまったりします。

本当にどうでしょうか？

子どもは、ある時期から自己主張を始めます。自己主張も全くしない、全くできないというのは、逆に子どもの発達に関して心配です。しかし、子どもは、自己主張しても受け入れられることと、受け入れてもらえないこととが存在することを学んでいきます。

ところが何らかの理由で、自分のやっていること、自分の欲求が全て受け入れられるのだと知ると、要求もエスカレートさせていきます。家庭でも、皆で一緒にテーブルについて食事すること、ゲームの終りの時間を決めることなど、家庭での生活を見直してみましよう。子どもが自分の気持ちに折り合いをもつけることができるようになるには、家庭の協力が欠かせません。

そして集団生活の中では良くないことを減らし、認められることを増やしていくことです。「ダメ!!」も連発しても子どもの心には響きません。「くすると良いよ」と

教えてもらうって「くしたらはめられた」という体験の積み重ねをしていくことです。

ただ、子どもたちの中には、発達特性をもっている子があり、白か黒しかなく、グレー（あいまいさ）が許せない子がいるのです。その子の指摘はまちがってはいないけれど、皆から次第に孤立してしまっています。そんなお子さんには、「くまでならいいね」という許容範囲を決めておいたり、ゲームの審判係をしてもらうって、「くまでだから認めます」といったことも考えてみましょう。

一番でなければ……という子には、一つ一つ小さなステップの働きかけが必要です。口でことは言うだけではなく、絵で示し、クラス全体の約束にしておくことです。一人の子だけ友達たちの中で孤立させないことは、保育の場でも教育の場でも大切なことです。

幼児期に自分の気持ちに折り合いがつけられないお子さんは、小学生になっても困るのは目に見えています。幼児期の遊びの中で身につけていく大切な力です。

次回 センター親の会は十二月十三日・九時半